

演劇 「笑いの大学」

原作・脚本:三谷幸喜

キャスト:西村雅彦(検察官)、近藤芳正(劇作家)

日本が戦争に邁進している頃の設定。娯楽は規制され、演劇の台本は警察で検閲を受けなければ上演できないという状況。

検閲官向坂は笑いと娯楽に全く無理解な人間でニコリともしない。特にこのご時世で笑うようなものを作るとはもっての他と考えている。そんな自分がこの度検閲という部署に回されたことに不満を感じている。

そこへ劇団「笑いの大学」の作家椿が台本の検閲を受けるためにやってくる。舞台はこの取調室で繰り広げられる。

向坂は、どうにかして台本を却下しようと無理難題を言っちは椿を怒らせ困らせ書き直しを命じる。台本は「ジュリオとロメエット」という喜劇なのだが、全て日本人にせよ！とか、キスシーンは無し！とか、日本の戦意を上げる内容を盛り込むため「お国のため」という言葉を3回連続で入れろ！などと注文をつける。しかも翌日までに直してこい。あまりの無理難題に椿は怒りながらも上演許可が欲しくて直してくる。しかしその直した部分は更に面白くなっている。「無理難題→訂正→更に面白くなる」が繰り返される。そのやり取りをしているうちに、椿は向坂に笑いの才能があることに気づく。そして向坂は無意識のうちに演劇にのめり込んでいく。向坂の注文はエスカレートし自ら演出までするに至り(もちろん無意識)、最後には向坂から訂正が出ると椿のヤル気がドンドン出てきて、台本はより面白くなっていく。

そうして台本が完成に近づいた頃、椿が発した言葉で、向坂が自分の職務職責を忘れてしまっていたことに端と気づいてしまう。そして更に難しい注文を出す。

しかしその晩椿に召集令状が届く。もう上演はできないことになってしまったが、椿は徹夜で台本を仕上げ、翌日向坂に持参する。

自分はお国のために戦ってくるので、その完成した台本は捨ててもらって良いと伝える。実は向坂は椿に召集令状がいかないように取り計らっていたが行き違いになったようだ。お国のために行ってきます！という椿に、向坂は職務上禁句の言葉「生きて帰ってこい」と言う。それに対し椿は、帰ってこれても劇団員は集まらないし上演は無理だと言う。向坂は、あの役もこの役も自分がするから二人でできる！と言い張る。

そして最後に向坂が、「この台本でもう一つ気になる部分があるのだが」と言った途端、椿がかけより、2人でまた机を挟んであれこれ話し合いを始めるところでTheEnd.

まさかの、単にネタバレのあらすじを書いただけという。

西村雅彦さん、上手だったー！さすが！

三谷幸喜さんの1990年代頃の舞台作品は本当に面白い。

「12人の優しい日本人」という作品もあって、日本にまだ陪審員制度が導入される前に、

日本の陪審員裁判を描いた喜劇ですが、これも本当に面白い！

ちなみに、「お国のために」を入れるようにと言われて訂正した内容は、「俺はお国のために戦う！お国のために…！お国ちゃんが好きだ！」だったかな？オクニちゃんという女性に変わっていました(笑)

演劇って、本当に良いものですね。

2021年1月 佐々木真理